

一般口演 | 教育・研修

一般口演23 教育・研修

2019年11月24日(日) 11:10 ～ 12:10 D会場 (国際会議場 2階中会議室201)

[4-D-2-02] 看護研究指導における遠隔面談の活用可能性の検討

○高島 真美¹、杉山 良樹²、山田 友美²、疋田 裕紀³、小林 日香里³、高見 美樹⁴、石垣 恭子⁴（1. 医療法人医誠会 看護研修センター, 2. 医療法人医誠会 医療情報部, 3. 医療法人医誠会 神崎中央病院 看護部, 4. 兵庫県立大学大学院 応用情報科学研究科）

キーワード：Nursing research instruction, Remote Interviews, Applicability

A医療法人では、各病院の臨床看護研究のサポートとして、法人本部の看護教育担当者（以下、本部指導者）が出向く対面面談による指導を実施している。しかし、法人本部から遠方に位置する病院は、本部指導者の時間的及び経済的制約があり、定期的な面談が難しい状況にある。そこで、遠方の病院においても本部の看護研究サポート機能を最大限に活用できるよう、B病院と法人本部でMicrosoft社のTeams®のビデオ通話会議機能を利用した遠隔面談を試行した。

試行期間は2018年4月から2019年3月までの1年間であり、従来の対面面談2回と遠隔面談2回を交互に実施した。遠隔面談ではプロジェクトを用いて面談の画面を面談者とB病院の看護研究指導者全員で視聴できるようにした。指導内容は、対面面談では、研究テーマの検討と抄録作成、遠隔面談ではデータ分析と発表練習とした。

試行期間終了後にB病院にて遠隔面談の準備及びサポートとその後の研究指導を担当した看護師5名に対して1時間のグループインタビューを実施した。その内容を分析した結果、遠隔面談のメリットは、「交通事情に左右されない」、「PC上に修正済みのデータが残る」、「データ分析やスライド修正のPC操作画面を全員で視聴できる」、「データの確認が何度でもできる」などであった。一方、デメリットは「器材の準備が必要」、「通信トラブルリスクに対する不安」、「ソフトの操作の不慣れ」「画面に映る面談者と映らない面談者に温度差がある」「当日の資料差し替えができない」「非言語コミュニケーションが不足する」などがあった。

以上より、看護研究指導の面談のうち、データ分析や発表練習などスキルに関する指導は遠隔面談にて代替可能であるが、テーマの検討や結果の解釈などの思考することに関しては対面面談が望ましいと考える。

看護研究指導における遠隔面談の活用可能性の検討

高島真美^{*1}、杉山良樹^{*2}、山田友美^{*2}、疋田裕紀^{*3}、小林日香里^{*3}、高見美樹^{*4}、石垣恭子^{*4}

^{*1} 医療法人医誠会 看護研修センター、^{*2} 医療法人医誠会 医療情報部、

^{*3} 医療法人医誠会 神崎中央病院 看護部、^{*4} 兵庫県立大学大学院 応用情報科学研究科

Consideration of the possibility of utilizing remote interviews in nursing research instruction

Takashima Mami ^{*1}, Sugiyama Yoshiki ^{*2}, Yamada Yumi ^{*2}, Hikida Yuuki ^{*3}, Kobayashi Hikari ^{*3},
Takami Miki ^{*4}, Ishigaki Kyoko ^{*4}

^{*1} Iseikai Medical Treatment Corporation Headquarters Nursing Education Center ,

^{*2} Iseikai Medical Treatment Corporation Headquarters Medical Information Department,

^{*3} Iseikai Medical Treatment Corporation Kanzaki Chuo Hospital

^{*4} Graduate School of Applied Informatics University of Hyogo

Abstract

The purpose of this study is to verify the applicability of remote interviews which uses a computer-based WEB camera for nursing research instruction. The remote interview was held between a nursing research instructor at the medical corporation headquarters and nurses at the hospital belonging to the same medical corporation. After a series of instruction, we conducted a face-to-face group interview with 5 nurses who had supported the remote interviews at the hospital. This group interview revealed the advantages and disadvantages of remote interviews for hospitals that received nursing research instruction. The advantages were that it was easy to understand the computer operations required for data analysis and slide creation, and that the contents of the instruction could be viewed repeatedly. On the other hand, disadvantages were the effects on the trainees, such as unnecessary tension due to unfamiliar situations that speak to the computer, and the indifference of those who did not appear on the screen. From these results, we think that instruction on skills such as data analysis and presentation for nursing research can be replaced by remote interviews, but the face-to-face instruction is necessary for thinking such as examination of research themes and interpretation of the results.

Keywords: Nursing Research Instruction , Remote Interviews , Applicability

1. 緒論

A 医療法人は、大阪に本部を置き、大阪府・京都府・奈良県・滋賀県・岡山県・愛知県に 9 つの病院を有する。法人本部の各部署は、各病院からの相談に対応しており、電子カルテ及び情報に関する相談は医療情報部が担当している。また、看護教育や看護研究に関する相談の担当部署として看護研修センターが設置されている。

看護研究センターが実施している各病院への臨床看護研究支援のひとつに、法人本部の看護教育担当者(以下、本部指導者)が病院に出向いて行う対面面談による指導がある。しかし、法人本部から遠方に位置する病院は、本部指導者の時間的及び経済的制約により、月 1 回などの定期的な面談が難しい状況にある。そこで、医療情報部に協力を依頼し、法人本部から遠方の病院においても本部の看護研究サポート機能を最大限に活用できるよう、滋賀県に位置する B 病院と法人本部で Microsoft 社の Teams® のビデオ通話会議機能を利用した遠隔面談を試行した。

この試行を振り返り、B 病院にて遠隔面談の準備及びサポートと今後の研究指導を担当した看護師にインタビュー調査を行うことで、今後の看護研究指導に遠隔面談をどのよう

に活用できるか考察し、示唆を得たので報告する。

2. 目的

看護研究指導における遠隔面談の活用可能性を明らかにする。

3. 方法

3.1 期間

看護研究指導期間は 2018 年 4 月から 2019 年 3 月までの 1 年間とし、2019 年 4 月にインタビュー調査を行った。

3.2 対象

遠隔面談にて指導を受ける B 病院にて面談準備とサポート及び面談後の研究指導を担当した看護師 5 名。

3.3 介入方法

3.3.1 従来の看護研究指導方法

B 病院では 2015 年度より、各部署で 1 つの看護研究グループをつくり、年 4 回程度の本部指導者による対面式の看護研究指導を受けていた。面談は本部指導者が B 病院を訪問

し、B 病院の会議室にて研究グループにつき 45 分間程度実施した。面談を効率よく行うために、面談日程の 1 週間前には、B 病院から作成中の研究計画書などの資料を郵送にて本部指導者に送ることにしていた。なお、郵送では資料送付が間に合わない場合は、メール添付で代用した。

年 4 回の面談内容は、初回が研究テーマの検討、2 回目がデータ集計及び分析、3 回目が考察と抄録作成、4 回目が発表に向けた準備であった。なお、本部指導者によるこれらの面談の合間に、B 病院の看護研究指導担当者が研究グループからの相談対応や資料提出のサポートを実施していた。

3. 3. 2 遠隔面談を用いた看護研究指導方法

法人本部と B 病院で Microsoft 社の Teams® のビデオ通話会議機能を利用した面談を導入した。遠隔面談導入にあたり、本部指導者、B 病院の看護研究指導担当者、医療情報部の担当者が法人本部に集まり、メンバー間の顔の見える関係づくりと、遠隔面談システムの基本操作に慣れることを目的とした勉強会を開催した。勉強会は 2 台の PC を用意し、2 時間の予定で、ログイン方法、テキストメッセージ及びビデオ通話会議の送受信、画面共有方法、ファイル共有方法の実践練習を行った。

遠隔面談における面談時間は、従来の対面面談と同様に 1 グループあたり 45 分間とした。年 4 回の本部指導者の指導のうち、第 1 回目の研究テーマの検討と第 3 回目の考察及び抄録作成は従来の対面面談で行い、第 2 回目のデータ集計・分析と第 4 回目の発表準備を遠隔面談で実施した。本部指導者は PC デスクトップ画面にて、B 病院の研究グループのうち 2 名程度が映った画面を見ており、B 病院では、指導を受けにきた研究グループメンバー及び看護研究指導担当者全員が遠隔面談の画面を視聴できるように、プロジェクトを用いて PC 画面をスクリーンに投影していた。

3. 4 データ収集方法

1 年間の看護研究指導が終了した 2019 年 4 月に、B 病院の会議室にて、インタビューガイドを用いた 60 分間の半構造的グループインタビューを実施した。質問項目は、1. 遠隔面談のメリット・デメリット、2. 遠隔面談に関して①困ったこと、②良かったこと、③今後工夫できる点とした。インタビューは対象者の同意を得て録音した。

3. 5 分析方法

インタビュー内容の逐語録を作成し、対面面談と比較した遠隔面談のメリットとデメリット、及び今後の遠隔面談に期待することに関する発言について文意を損なわないよう抽出した。

3. 6 倫理的配慮

インタビューを実施するにあたり、対象者全員に口頭及び文書にて調査目的、調査への協力は任意であること、一旦同意した後でも途中退席は可能であること、調査の協力を断ること・途中退席することによる不利益はないこと、インタビュー内容を録音すること、音声データは逐語録作成後に廃棄すること、発言内容は匿名化して取り扱うことを説明し、文書にて同意を得た。なお、本インタビュー調査の実施にあたり A 医療法人看護部長会議及び B 病院の承認を得た。

4. 結果

4. 1 回答者背景

インタビュー回答者 5 名の職位は副看護師長 2 名、看護主任 2 名、職位なし 1 名であった。いずれも看護研究経験者であり、看護研究指導歴は 1 年未満が 1 名、2-3 年が 3 名、4 年以上が 1 名であった。

4. 2 遠隔面談のメリット・デメリット

従来の対面面談と比較した遠隔面談のメリットとして多く語られていたのは、デモンストレーションとして修正したデータが PC に残ること、そのデータを繰り返し確認できることであった。次いで、交通事情に左右されないこと、データ分析やスライド修正の PC 操作画面を全員で視聴できること、途中の中断及び再開ができること、事前の資料提出が郵送・メールより容易であることがあった。具体的な発言は表 1 に示す。

一方、デメリットとしては、面談者の緊張と対面にはない気まずさ、画面に映る面談者と映らない面談者の温度差、非言語コミュニケーションの不足、面談者が紙の資料を持ってきて共有できないことなど、指導を受ける面談者への影響が語られた。また、面談のサポート者として、ソフト操作の不慣れや、通信トラブルリスクに対する不安、器材の準備が必要であることが語られていた。具体的な発言は表 2 に示す。

4. 3 今後の遠隔面談に期待すること

今後の遠隔面談に期待することに関する発言は、遠隔面談を利用した臨時での相談対応と、いつでも相談できることによる研究グループメンバーの安心や看護研究へのモチベーションの向上があった。

5. 考察

遠隔面談を用いた看護研究指導の最大のメリットは、研究指導者の移動に伴う時間的・経済的負担が軽減されることである。しかし、遠隔面談を進めるには、指導を受ける施設のメリット・デメリットを明らかにし、その活用可能性を検証する必要があると考え、今回の調査に取り組んだ。その結果、指導を受ける施設のメリットとして、最も多く語られたことはデータ共有に関することであった。今回使用した Web 会議システムには、画面共有機能とファイル共有機能が付加されていたため、データ集計・分析時の PC 操作のデモンストレーションと、修正後のファイルを入手できたことが研究支援として効果的であったことが伺えた。類似した内容として、データ分析やスライド修正の PC 操作画面を全員で視聴できることもあったが、このことから研究で使用する PC 操作の説明に遠隔面談とその付加機能が有効であったことが伺えた。ある全国調査によると、中・大規模の病院では 88.4% の割合で看護研究が実施されており、その研究支援上の課題で最も多かったものは「データ分析及び考察」、次いで「研究テーマの決定」であった¹⁾。この研究支援のうち、データ分析に関しては遠隔面談でも対応可能であり、遠隔面談を用いることは研究支援上の大きな課題を解決できる可能性がある。

また、その他のメリットとしてあげられた交通事情に左右されないことに関しては、今回の遠隔面談のうちの 1 回が、局地的な大雨による交通規制のために対面面談から遠隔面談に急遽切り替えたものであったことが影響している。交通事情により、研究指導者が物理的に移動できない場合、通常の対面面談では面談の日時や場所の再設定を行わざるを得ない。しかし、シフト勤務である看護師は、近日中の日程の再調整が困難な場合が多い。その際に遠隔面談を使用して予定

どおり面談ができるメリットは指導を受ける側でも大きいものであったと考える。

次にデメリットとして、「面談者の緊張や気まずさ」、「画面に映る者と映らない者の温度差」、「非言語的コミュニケーションの不足」など、指導を受ける研究グループメンバーへの影響が語られていた。これは遠隔面談では初対面での会話や、1対複数の対話は難しい事を示している。先行文献²⁾でも、放送大学大学院で修士論文の研究指導にインターネットTV会議システムを用いた事例において、修士論文の指導をTV会議のようなメディアが介在するシステムのみに頼ることは難しいこと、直接対面では1対5の対話が成立するが遠隔面談では複数との対話が難しいことの2点が報告されている。このような初対面での会話や1対複数の対話が難しいことは遠隔面談の限界であり、初対面や対話を必要とする指導内容の場合は対面式面談で補う必要があると考える。そのため研究指導の最初の面談で行うことが多い研究テーマの検討や、対話を必要とするデータ分析後の考察に関しては遠隔面談ではなく、対面式面談が適していると考ええる。

また、遠隔面談を行うにあたり、面談サポート者の準備や不安が語られていたことから、今後、新たな施設で遠隔面談を導入する際や遠隔面談サポート者が交代する場合には、遠隔面談サポート者に操作やトラブルシューティングの実践練習を行うなどの支援が必要であると考ええる。

最後に、今後の遠隔面談への期待として、臨時相談対応と看護研究へのモチベーション向上が語られた。看護師は、その専門職としての責務として研究や実践を通して、専門的知識・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与することが求められている³⁾。その一方で研究支援に関しては課題が様々に報告されており、組織外のリソースを活用した研究支

援の必要性⁴⁾や、院内での看護研究の指導ができる人材の育成の必要性⁵⁾が示唆されている。今回のような関連組織に所属する指導者が遠隔面談で研究指導を行う体制は、組織外リソースの活用や院内研究指導者育成の代替案としても活用可能であると考ええる。

6. 結論

看護研究指導の面談のうち、データ分析や発表準備などのスキルに関する指導は遠隔面談にて代替可能であるが、テーマの検討や結果の解釈などの思考に関しては対面式面談が望ましいと考える。また、遠隔面談は、臨時相談の需要があることが明らかとなった。

7. 文献

- 1) 坂下玲子, 北島洋子, 西平倫子, 宮芝智子, 西谷美保, 太尾元美. 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学会誌 2013;33(1):91-97.
- 2) 杉浦克己. 遠隔研究指導の具体的方法の模索～インターネットTV会議システムを用いた遠隔ゼミ～. 情報管理 2005;48(4):226-229.
- 3) 公益社団法人日本看護協会. 看護者の倫理綱領. 2013. [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf (cited 2019-Aug-28)].
- 4) 前掲 1)
- 5) 路璐, 北池正, 池崎澄江. 千葉県内の病院における看護研究の支援状況の実態と課題. 日本看護研究学会雑誌 2019;42(2):241-248.

表 1 対面式面談と比較した遠隔面談のメリット

内容	具体的発言
PC 上に修正済みのデータが残る	・データがすぐに、先生に直接打っていただけて、そのデータがもらえるっていう安心感は指導者も相談者も多かった ・各部署の担当者もすごく嬉しいっていうのもみんなから、後からも聞きました
データを繰り返し確認できる	・データとして残るので、後からメンバーが「さっきなんて言っていましたっけ？」とか、「どういう風にしてましたっけ？」とか言うことが全然なかった ・指導してもらった内容が戻ってから見れたので伝わりやすかったのかな ・先生が言うてたのに修正できていないということが、対面と比べてすごく少なくなった ・パソコン苦手な人はわかりづらいから教えてほしいっていうのが対面のときにはありましたけど、それが大幅に減りました
交通事情に左右されない	・台風とか、いろいろ災害があったときに、「明日、先生が来れるかな」っていうのを心配しなくてよい ・対面できなかった部署を後で遠隔っていう形もとれるので、すごい便利
データ分析やスライド修正の PC 操作画面を全員で視聴できる	・研究指導者も一緒に画面を見ながらできたのが大きなメリットだった ・エクセルでの統計操作を画面に映し出すことで、研究指導者の統計の勉強になりました
途中中断、再開ができる	・休憩時間とかは、まあお互い一旦切るっていうことができるので、すごいリフレッシュした休憩時間を送れる
事前の資料提出が郵送・メールより容易であること	・郵送やと、抜けてないかなって、すごい自分が思うんですけど、あれやったら、ちゃんと送れてるなって見直せるので、ありがたい ・簡単にアクセスできるので、あの、「先生お疲れ様です」の文章から始まり、たくさん打たなくても、これでポイとたくさんデータを送れるのはすごいありがたかった

表 2 対面式面談と比較した遠隔面談のデメリット

内容	具体的発言
面談者の緊張と対面にはない気まずさ	・面談者がちょっと緊張していはるかなと思いました ・最初の遠隔面談を開始するとき、もう緊張して何からしゃべったらいいんやろうって、みんなが受け手になってしまって、先生にお話してくださいって言われてからしか、話せないっていう状況がみんな一律であった ・普段と違う面談で、機械の操作も面談者が自分でしなければいけないし慣れない環境で不安だったのでは ・待ち時間とかも遠隔やと気になって、なんか電話と同じ感覚やから、お待ちくださいっていうのがすごい、悪い気がした
画面に映る面談者と映らない面談者の温度差	・複数人で来るときに、面談者が全員映らない ・画面に話している周りの責任感がちょっと薄れてくるっていうのもありました ・データも後でもらえるっていう安心感から、あんまりメモをとってない人も結構いた ・全員対面できないリスクがあって、面談者のメインの人はこうしゃべってるけど、横で聞きたくても聞けへんのも、大丈夫かな〜と
非言語コミュニケーションが不足すること	・映像を通してしかできないので、雰囲気とか、よくいうオーラとか、っていうのがわかりにくいんじゃないかなっていうのが感じました ・1 回は対面して、人間関係ができてからだったら、もっと活かせられるのかな
面談者が紙の資料を持ってきて共有できないこと	・データを、「私、今日また変えてきました、これで追加の分です」って紙で持ってくるのが困った ・遠隔っていうときに、こうやりながら(用紙を裁判の判決の時のように見せながら)先生に、カメラに向かって見せれるのかなって思っていました
ソフトの操作の不慣れ	・パソコン操作がもともとすごい苦手で、苦手意識があるので、もう、そもそもパソコンの時点でいやだなぁっていう思いがすごくあります ・画面が途中で止まってしまったとき対応してくれる人がいないと困る ・研究指導者側にメンタル的な不安が結構あります ・パソコンの操作技術によって、すごい、なんか後で大失敗するのが心配
通信トラブルリスクに対する不安	・通信トラブルのリスクがあるかもしれへんっていうずっと不安を抱えながら面談のサポートをしなければいけない
器材の準備が必要	・Web 会議システムの準備、パソコンのカメラとかの物も必要